
自殺

三一

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺

【Nコード】

N3545T

【作者名】

三二

【あらすじ】

春と初夏の混じり合う季節。放課後の屋上に何気なく集まった駿と茜。彼らは、平凡にすぎていく毎日を生きていることを確認するため、東校舎の屋上から「自殺」をする。

土の匂いがする。春風に巻き上げられた、乾いた匂いだ。学校の屋上のフェンスに両肘と顎を載せながらぼんやりとグラウンドを見下ろしていた。夕暮れと、サッカー部が声をあげてボールを追いかけているのが見える。今日は水曜日。明日は確か女子ソフト部が使うはずだった気がする。

俺は帰宅部だから関係ないけど、毎日見ているから覚えてしまった。スポーツやって汗かいて頑張っているやつを見下してるわけでもない。友達にもたくさんそういうやつはいるし。要はみんなやりたいことを自由にやって、満足していればそれでいい。俺もここでもぼんやりしているのを無気力に感じてはいない。満足している、それなりに。

「サッカー、したいの？」

後ろから細くて高い声がした。誰だかは知っていたので、振り向かないまま俺は笑った。

「体育と昼休みでやってるから部活はいいや。お前こそ、部活終わったのか？」

彼女は、何も答えない。あまりにも沈黙が長いので、さすがに振り返った。

すると、広い屋上の真ん中で胡坐をかいてPSPに夢中になっている彼女がいた。呆れて俺はフェンスから離れ、よれよれになった鞆を持って彼女の隣に座った。

こいつは黒髪ロングやら茶髪やらで化粧もバツバシな女子とは正反対だ。黒髪のベリーショート、すっぴんでも端正な顔立ちで、

飾らない。

「スカートで胡坐かくなよ」

「…あー、中に短パン履いてるから大丈夫」

性格はこんな感じ。男寄りの考え方なので、女子から人気もある。一部の女子…まあ、正反対な奴らにはそうとはいえないが。

俺は「そうかよ」と短く答えてその場に寝っ転がった。

空はオレンジと青が混ざりかけた色。絵具を混ぜてもあんな色にならないのに、どうして空だと綺麗なんだろう。いつも思う。その上に飛行機雲が二本不規則に重なっている。小さい頃は、空の飛行機を見つけては友達とよくわからない願い事をして遊んでいた。叶った試しなんてないのに、何回も、何回も。

「なあ」

「ん」

「子供ん時さ、飛んでる飛行機に向かって願い事しなかった？」

少し間をおいて、彼女はPSPのスタートボタンを押してこっちを見た。

「したかもしれない。たぶん」

そう言うときまたスタートボタンを押して、視線を小さな画面に戻した。

俺はそんな彼女にいつもどおり「だよなあ」とだけ返した。ゲームに夢中になっている時はいつもこうだからだ。半分聞いているが、

半分は聞いていない。

俺たちはいつも、放課後5時半にここに来る。約束したわけでもないし、そう決まってるわけでもない。屋上には俺たちだけ。なぜなら、ここへの出入り口は理科準備室の窓からしか入れないからだ。この学校の屋上は今俺たちがいる東校舎と、西校舎がある。この東校舎と繋がっているが、西校舎の屋上の方が1m低いという変な作りだ。西校舎の屋上は音楽準備室の窓に繋がっている。

俺は科学部という名の帰宅部で、理科準備室の鍵当番。一方、こいつは音楽の小林先生と仲がいいので、音楽準備室の窓をいつも開けてもらっている。そうやって、俺たちはここに自由に入ってくる。

「駿^{しゅん}、数学の小テストした？」

彼女はゲームを止めて鞆からノートを出してきた。俺は何も言わずに今日やった小テストを渡した。

「ありがと。うわ、満点かよ」

「帰宅部することねえもん」

「帰りに遊びに行ったりしないの」

「たまに」

「はあ」と力のない返事をしながら彼女はノートにそれを写した。その間、俺はケータイで友達にメールを返していた。今度の日曜にサッカー部は試合があるらしく、応援に行くことにしている。さっきも校庭で声を出していたやつだ。

「はい、どうも」

「おう。そろそろやるか？」

「そーねー」

彼女は立ちあがってスカートをはいた。

ああ、確かに短パン履いている。わかっていてもちよつと残念に思うのは男の悲しき性だ。背は普通より少し高くて、細い脚。ブレザーがよく似合う。野球部のマネージャーっぽくないと思うのは俺だけだろうか。

軽い足取りで鞆を持ちながら彼女は東校舎と西校舎の境目に立った。風が彼女の短い髪を細くくねらせる。後ろから見るとなんとなく凜々しい。俺も隣に並んで下を見下ろした。

いつも思う。ここに立つとまるで屋上から飛び降りるような、緊張とちよつとした恐怖が入り混じる。そしてどこからともなく感じる、高揚感。俺たちは制服と鞆と靴を身につけて、この屋上から身を投じる。

「今日はどんな一日だった？片岡駿」

「楽しかったことは休み時間と体育。あと理科のさかもつちゃんの雑談。不快だったのはA組の森岡たちに絡まれたこと」

「絡まれてどうしたんですか？」

「アキミチがすぐに助けに来てくれましたー」

アキミチは友達で柔道部のエース。身長は190オーバーの頼れるやつだ。

「情けねー」

「うるせー。今日はどんな一日だったんですか？枝野茜」

「楽しかったことはエリカとサキと話したことと、部活が早く終わったことと、ユカリに彼氏ができたことー。不快だったのは購売のパンが売り切れてたことと、さっきB組の名波と小田が教室でチユーしてるのをみてしまったことー」

「名波と小田？付き合ってたのあいつら？」

「さあ。そういうことでしょ。あのまま先生に見つかってしまえば面白いのにー」

二人で笑いながら暗くなっていく空と雲を見ていた。今日も終わる。一日が終わっていく。ただの、平凡な学生的一天が。

終わることは、死ぬことに似ている。始まることは、生まれることに似ている。生きることは連続的な出来事。一日も同じなんだ。朝に生まれて、昼を生きて、夜で死ぬ。そしてまた明日を生きられる。

それを確認するために俺たちはここに立っている。繰り返されて麻痺しそつになる毎日を整理するために。生きていることを再確認するために。一日をただの一瞬にしたいから。

「総合して、今日も私の世界は平和でしたとき」

「俺の一日は少しひやつとした以外は平和だった」

二人で合図することなく、東校舎の屋上から飛び降りた。自殺をするんだ。自殺の真似事をしながら、俺たちは生きたいと

思っている。宙に浮かぶ瞬間は達成感と後悔を背負いながら、重力に抱き寄せられる。何気ない日常を、平凡に、幸せに生きていることを、西校舎に下り立つ瞬間に噛みしめる。足にジンとくる感覚は、俺たちが生きている証だ。

「明日もいい一日になりますように」

茜は手で空に三角形を作りながら呟いた。

「何してんの」

「さっき言ってたでしょー。久々にやってみたの」

見上げると、チカチカと光を点滅させながら飛行機が群青に染まる空を泳いでいた。

「でも願い事叶ったことある？」

「うーん… 忘れた！ ていうか夢のないこと言わないでよ」

こんなのは根拠のない子供の遊びで、歳を重ねるうちにいつの間にかやらなくなってしまったもの。なつかしみはするけど、今さらやるのは気が引ける。

「まあ、験担ぎみたいなもんじゃない？ こういうのって」

「…そうだなあ」

俺は三角形を作って飛行機が見えなくなる前に空に掲げた。

「今日気持ちよく寝て、明日気持ちよく起きれますように」

「なにそれ」

「験担ぎ」

呆れた顔で彼女は音楽準備室の窓を開けに行ってしまった。暗くなる時間が気温の上昇とともに遅くなっていく。明日は暑くなるらしい。家に帰ったら、いつものテレビ番組と母親の夕食が待っている。

「満足」

駿は小さく呟く。そして茜の後をゆっくり追いかけながら、笑っていた。

おしまい

（後書き）

初投稿です。読んでくださった方、ありがとうございました。評価
等いただければ光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545t/>

自殺

2011年10月9日02時45分発行